

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03486

研究課題名(和文) 朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study on River Management and Utilization for the Creation of Korean Environmental History

研究代表者

六反田 豊 (Rokutanda, Yutaka)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：40220818

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,900,000円

研究成果の概要(和文)：朝鮮時代から日本の植民地期に至る時期において、朝鮮の人々が河川をいかに管理・利用してきたかという課題を環境史的な視角から検証するために、関連資料の収集をおこなうとともに、7回にわたり漢江や洛東江をはじめとする朝鮮半島内の主要河川において現地調査を実施した。その際、博物館や図書館等、現地の研究機関を訪問して意見交換の場ももった。主に 交通・運輸、治水・利水、資源利用、景観・空間利用といった4つのテーマから接近を試み、その成果を論文や口頭報告として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

環境史への関心の高まりにもかかわらず、朝鮮史ではこれまで環境に注目した研究がほとんどなされてこなかった。そのようななかで環境史研究に本格的に踏み出した点、朝鮮半島と類似した自然環境を持つ日本やその他の地域に関する知見を相対化する素材を提供した点に、本研究の学術的意義がある。河川は人間にとって最も身近かつ重要な環境の一つであり、しかも現代において最も急激に変容した環境でもある。そうした河川と人間との関係を環境史的に考えることは普遍的な課題である。

研究成果の概要(英文)：In order to verify the issue of how Korean people managed and used rivers during the period from Joseon era to Japanese colonial era from the perspective of environmental history, we collected historical materials concerned with this subject, and carried out fieldwork 7 times in major rivers of the Korea Peninsula, including Han River (or Hangan) and Nakdong River (or Nakdonggan). At that time, we also had opportunities to visit local research institutions such as museums and libraries, and exchange opinions with researchers. Mainly we tried to approach from 4 theme: Transportation, Flood Control and Irrigation, Resource Utilization, Landscape and Space Utilization, and published the result as papers and oral reports.

研究分野：朝鮮史

キーワード：朝鮮史 環境史 水環境 河川 水運 治水 利水 漁撈

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、朝鮮半島における河川の管理・利用をめぐる歴史的諸事象を、朝鮮時代から日本の植民地期まで(14世紀末~20世紀前半)を対象にして環境史的視角から考察しようとするものである。環境史は近年になって注目を集めるようになった新しい研究分野である。しかし朝鮮史においては研究者の関心が低く、河川をはじめとする水環境に関する研究も皆無に等しい状況にあった。

その一方で韓国では、漢江・洛東江・錦江・栄山江の四大河川再生事業を代表的事例として、近年、河川開発をめぐる環境問題が大きく注目されるようになった。本研究の代表者・分担者は、こうした現在の河川環境問題が論じられる際、人々が水環境といかに関わってきたのかという問題意識が希薄であり、歴史的な経験に根ざした議論がほとんどみられない点に疑問を覚えた。そして、今後の展望を開くためには歴史的視点を踏まえた議論を重ねる必要があり、現実社会に生きる歴史研究者として何らかの社会的貢献が可能であるとすれば、まさにそうした議論のための素材を提供することである、との思いに至った。

本研究の代表者・分担者はこれまで何らかの形で海洋や河川に関する研究に携わってきたが、特にそのうちの3名は四大河川再生事業に際して改修対象河川の水環境を緊急に現地調査する必要性を感じ、2010-12年度に科学研究費補助金を得て、漢江を対象として流域各地での現地調査および関連資料の蒐集・整理とそれに基づく実証的研究を試みた。この研究の遂行を通じて、人類の生存に不可欠かつ人類にとって最も身近な存在でもある河川を対象とする環境史的研究を、朝鮮半島を対象におこなうことの意義を再認識したことが、本研究を構想し開始する大きな契機となった。

2. 研究の目的

上述のように、本研究の目的は朝鮮半島における河川の管理・利用について環境史的視角から考察することである。対象時期は朝鮮時代から近代移行期を経て日本の植民地期まで(14世紀初~20世紀前半)とした。

一口に河川の管理・利用といってもその範囲は多岐にわたるため、本研究では、交通・運輸、治水・利水、資源利用、居住環境・景観の4テーマを設定して、代表者・分担者が分担して研究を進めることとした。このうち ~ は人類にとって最も基本的かつ普遍的な河川とのかかわり方に関するものである。一方 はこれらとはやや次元を異にした河川利用の側面に着目するもので、具体的には河川利用をめぐる人間関係や諸権利の問題、あるいは遊興空間としての河川環境などを想定したテーマ設定である。いずれも人類が河川といかに向き合ってきたかを考えるうえで不可欠の課題であることは贅言を要しない。

研究期間である4年間に、上記の4テーマに関する史料蒐集と韓国での現地調査(主要河川での関連史跡踏査と附近住民からの聴き取り調査、および現地研究機関等での意見交換や研究情報の蒐集など)をおこない、研究の基盤を固めることを第一の目的とした。併せて上記の調査活動を通じて得られた史・資料に基づき、環境史的視角からの実証研究を進めることを第二の目的とした。これらの活動を通じて、河川を中心に据えた朝鮮環境史の創成を目指した。

3. 研究の方法

本研究においては、韓国での現地調査を最も重視した。現地に赴き、景観をじかに確認することは重要な意味を持つ。朝鮮半島の河川は大陸河川に比べると日本の河川に近いが、河川工学的および生態環境的にみると違いも少なくない。日本の河川と表面上は類似するだけに、文献調査だけでは実像を十分に捉えることができない。そこで文献情報を現地で観察結果と突き合わせることで精確な理解を期そうと考えた。さらに韓国の場合、産業化以前の伝統的な河川と生活との関係はダム開発が本格化する1970年代までは維持されていたので、現地住民からの聞き取り調査は、伝統的な生活のサイクルのなかで河川や水辺がいかに位置づけられてきたかを考えるうえで今日もなお意義がある。

本研究の代表者・分担者のうちの3人は、すでに漢江に対して何度かにわたり現地調査を実施した経験がある。本研究では朝鮮半島の河川環境の地域的偏差を考慮し、漢江だけでなく、その他の河川でも調査をおこなうこととした。すなわち漢江とともに韓国の主要河川である洛東江・錦江・万頃江・栄山江・蟾津江を主たる対象としたが、これらの河川は上記の4テーマがそれぞれ濃密に絡み合い、かつ資料が相対的に豊富であって、調査対象として好適と考えたからである。さらに、これらの河川流域とは大きく自然環境の異なる東海岸地域(太白山脈の東側の地域、大川がほとんど発達せず、平野に乏しい)の中小河川でも現地調査をおこなうこととした。これらの現地調査は各年度2回ずつの実施することとした(最終年度のみ1回)。

また韓国での現地調査と並行して、朝鮮半島の河川と日本の比較という観点から日本国内の河川でも現地調査も実施する予定だったが、経費の関係もあり断念した。

現地調査と併せて、文献蒐集と史料蒐集を進めることも研究基盤の確立という点で重要である。韓国の諸研究機関が発行する各種調査報告書等、国内では入手しづらい文献の蒐集と目録化を進めるとともに、前近代の官撰年代記や官撰・私撰の地理書・邑志等の地誌類、植民地期に作成された各種調査報告書等から関連記事の抜粋と蒐集を実施することとした。

このほか、本研究の進展状況を踏まえつつ、代表者・分担それぞれが上記①~④のテーマについて個別に実証的研究を進めることにした。

4. 研究成果

研究期間中、韓国での現地調査を合計7回実施した。具体的な日程と各回の調査地域は次のとおりである。

- 第1回 南漢江中流・北漢江と南漢江の合流部・南漢江支流蟾江(2016年9月18日~22日)
主要調査地：広州・南楊州・楊平・驪州・原州・横城
- 第2回 錦江・万頃江(2017年3月14日~18日)
主要調査地：井邑・益山・完州・扶餘・公州
- 第3回 洛東江中下流(2017年9月22日~25日)
主要調査地：星州・大邱・昌寧・密陽・梁山・金海
- 第4回 洛東江下流・洛東江支流南江(2018年3月13日~17日)
主要調査地：漆原・宜寧・晋州・陝川・高靈・永川・清道・慶州・梁山
- 第5回 洛東江上流(2018年9月12日~16日)
主要調査地：安東・礼安・奉化・荣州・醴泉・尚州
- 第6回 荣山江・蟾津江(2019年3月12日~16日)
主要調査地：木浦・靈岩・務安・咸平・羅州・光州・潭陽・南原・求礼・河東
- 第7回 東海岸地域(2019年8月18~22日)
主要調査地：襄陽・江陵・三陟・盈徳・浦項・蔚山

これらの現地調査では、朝鮮時代から近代にかけての文献に確認できる水運拠点・渡船場・河港などの跡地・推定地、朝鮮時代の漁場(官設の漁撈施設設置場所)推定地、江辺にある楼閣・亭子などの歴史的施設等を踏査するとともに周辺住民に対する聴取り調査をおこなった。さらに各調査地の行政機関(道庁・郡庁など)のほか、韓国農漁村公社東津支社・江景歴史館(以上第2回)・釜山漁村民俗館・釜山市寄託近代歴史館・洛東江河口エコセンター(以上第4回)・儒教文化博物館・国立洛東江生物資源館(以上第5回)・国立羅州博物館・国立光州博物館・蟾津江魚類生態館(以上第6回)・内水面生命資源センター・三陟市立博物館・三陟市淡水魚展示館・迎日民俗博物館・堤防遺跡博物館・蔚山博物館(以上第7回)などの施設を訪問し、関連資料の提供を受けるとともに、施設関係者と情報交換したりその案内で関連史跡を訪ねたりした。いずれも限られた期間での調査であり、必ずしも十分なものとはいえない。しかし四大河川(漢江・洛東江・錦江・洛東江)を含め韓国の主要河川を一通り踏査できた点は、今後の研究に大いに資するものと考えられる。

現地調査を中心とする本研究の具体的な成果としては、(1)文献記録だけでは所在地が確定しきれなかった水運拠点(税穀載船地)や河港・渡船場等の候補地を実見することで、それらのうちいくつかについて現地比定のうえで有力な情報を得たこと、(2)朝鮮時代から存在する主要な農業灌漑施設(跡地を含む)を実見し、文献上の記述と突合してその具体的立地状況を確認できたこと、(3)近代における大規模水害の様相とその被災地を文献と突合して確認できたこと、(4)植民地期に日本人の入植者によって水利施設が大規模に整備された万頃江流域について、現地研究施設の関係者の案内で植民地期に整備された灌漑用水路を詳細に辿り、関連資料を蒐集できたこと、(5)これまでまったくといっていいほど論じられてこなかった朝鮮時代の河川漁業について、文献に現れる当該期の漁場推定地を現地で確認できたこと、(6)朝鮮時代の在地土族と河川景観との関係を知るうえで重要な意味をもつ各河川近傍の楼閣や亭子を訪ね、その立地や設立の由来などに関する情報を蒐集できたこと、などをあげることができる。それらの成果の一部は、代表者・分担者による論文や口頭発表として公表した。

本研究は、近年学術的・社会的重要性を増しているにもかかわらず、これまでほとんど研究が進んでいなかった朝鮮半島の環境史研究を河川という対象を通じて本格的に進めていく端緒となったといえる。目指すところの朝鮮環境史の構築にはいまだ課題も多く、さらに時間を要しようが、日本をはじめ他地域の環境史研究の成果に朝鮮半島のそれを多少なりとも付け加えることができたとはいえるだろう。

なお、朝鮮史研究会との共催で、本研究の成果と今後の課題を整理したミニ・シンポジウムを下記の内容で2020年3月30日に東京大学にて開催すべく準備していたが、新型コロナウイルス感染症流行のため、中止のやむなきに至ったことは遺憾である。今後、事態の収束状況を見極めつつ、あらためての開催を計画したい。

- 報告：森平雅彦「朝鮮中期の洛東江上流域における「淡水魚生活」」
長森美信「17世紀朝鮮士人(ソンビ)と河川空間 澗松趙任道と洛東江」
六反田豊「環境史からみた朝鮮時代の水利施設 堤堰と川防を中心として」
石川亮太「近代の開港場貿易と河川輸送」
広瀬貞三「植民地期朝鮮における大同江改修工事と地域社会」
コメンテーター：伊藤亜人氏(東京大学名誉教授)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長森美信	4. 巻 17
2. 論文標題 訪忘憂亭記 朝鮮士人と亭子文化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 韓国朝鮮の文化と社会	6. 最初と最後の頁 166-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 長森美信	4. 巻 249・250
2. 論文標題 一七世紀朝鮮士人と洛東江 『寒岡先生蓬山浴行録』を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝鮮学報	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 広瀬貞三	4. 巻 50-1
2. 論文標題 朝鮮総督府日本人土木官僚の社会・工事認識	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 275-307
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 広瀬貞三	4. 巻 18-2
2. 論文標題 戦前の木曾川における発電所工事と朝鮮人労働者	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福岡大学研究部論集 A：人文科学編	6. 最初と最後の頁 155-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広瀬貞三	4. 巻 21
2. 論文標題 1934年朝鮮南部の洪水と復旧活動 洛東江を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 年報朝鮮学	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 六反田豊	4. 巻 なし
2. 論文標題 朝鮮初期の漕運 制度の整備過程と運営実態からみたその歴史的 성격	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 韓国・朝鮮史への新たな視座 歴史・社会・言語 (須川英徳編、勉誠出版刊)	6. 最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広瀬貞三	4. 巻 49-2
2. 論文標題 朝鮮総督府の土木官僚本間徳雄の活動 朝鮮・満洲国・中国・日本	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 589-624
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森平雅彦	4. 巻 20
2. 論文標題 朝鮮における内水面水産資源利用の歴史に関する導入的考察ー内水面環境とヒトの関係史のひとつとして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 年報朝鮮学	6. 最初と最後の頁 134-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川亮太	4. 巻 49-4
2. 論文標題 韓国保護国期（1905～10）における華商の活動：駐韓清国領事館「商務報告」から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 佐賀大学経済論集	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川亮太	4. 巻 28
2. 論文標題 朝鮮開港をどう考えるか：拙著『近代アジア市場と朝鮮』に寄せて	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 News Letter（近現代東北アジア地域史研究会）	6. 最初と最後の頁 72-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広瀬貞三	4. 巻 48-1
2. 論文標題 戦前の富士川水系笛吹川改修工事と朝鮮人労働者	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 321-348
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広瀬貞三	4. 巻 240
2. 論文標題 近代朝鮮の水道事業と地域社会	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 朝鮮学報	6. 最初と最後の頁 1-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 六反田豊	4. 巻 17
2. 論文標題 朝鮮初期の財政制度と鄭道伝	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 韓国朝鮮の文化と社会	6. 最初と最後の頁 102-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 石川亮太
2. 発表標題 朝鮮開港直後の貿易商品について
3. 学会等名 「開港期」朝鮮を中心とする「交隣」の総合的研究・「東アジア世界秩序での朝鮮の「交隣」」 日韓合同シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川亮太
2. 発表標題 朝鮮開港後の貿易商品に現れた連続と断絶 海藻を例に
3. 学会等名 脇村孝平先生を囲んでの研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 広瀬貞三
2. 発表標題 1934年朝鮮南部の洪水と復旧活動 洛東江を中心に
3. 学会等名 九州史学会大会朝鮮学部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 広瀬貞三
2. 発表標題 戦前の木曾川水系発電所工事と朝鮮人労働者
3. 学会等名 九州史学会大会朝鮮学部会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長森美信
2. 発表標題 十七世紀朝鮮士人と洛東江 『寒岡先生蓬山浴行録』を中心に
3. 学会等名 朝鮮史研究会関西部会2月例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 六反田豊
2. 発表標題 朝鮮初期の財政制度と鄭道伝
3. 学会等名 第3回三峯学国際学術会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 石川亮太
2. 発表標題 朝鮮開港への経済史的アプローチ
3. 学会等名 東京大学コリア・コロキウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石川亮太
2. 発表標題 開港場仁川における商業と華僑
3. 学会等名 国際シンポジウム・チャイナタウンと北東アジアの開港場（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森平雅彦
2. 発表標題 朝鮮時代の内水面魚梁 慶尚道地域の事例から
3. 学会等名 九州史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 広瀬貞三
2. 発表標題 戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者
3. 学会等名 朝鮮学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 六反田豊
2. 発表標題 15世紀朝鮮の税穀水運
3. 学会等名 東京大学コリア・コロキウム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石川 亮太 (Ishjkawa Ryota) (00363416)	立命館大学・経営学部・教授 (34315)	
研究分担者	早川 貞三 (Hayakawa Teizou) (40267703)	福岡大学・人文学部・教授 (37111)	
研究分担者	森平 雅彦 (Morihiro Masahiko) (50345245)	九州大学・人文科学研究院・教授 (17102)	
研究分担者	長森 美信 (Nagamori Mitsunobu) (50412135)	天理大学・国際学部・教授 (34602)	